

# いたちかわらばん

通刊 23 号

颯川・独川 / 川原番・瓦版

03 秋号



版画 宗森英夫

大いたち橋より上流を望む

切り取り線

この部分を切り取ってファイルすると便利です

### 河川敷の外来植物

河川敷は大雨が降って増水すると水没したり、土砂が流されたりして、環境が大きく変わります。上流から流されてきた瓦礫や土砂で埋まったり、崖崩れが起こったりして地形が大きく変わることもあります。そのため、既存植物が全く生えていない新しい環境が造られます。外来種が進出しやすい条件が生まれるのです。

横浜港は貿易港として世界各地から様々なものを輸入していますが、その中にまぎれて植物の種も入ってきます。検疫の網の目をかいくぐって外来種の植物が進入してくるのです。そのため、神奈川県・特に横浜市は外来植物が多い地域です。

いたち川も、この二つの条件で外来植物がたくさんみられます。前号で紹介したクレソンを初めセイタカアワダチソウやオオバブタクサのようなものでいろいろいる発見できます。アメリカセンダングサやメキシコマンネングサのように名前からして外来種とわかるものもあります。今では多くの人になじみになっていくシロツメクサ(クローバー)やセイヨウタンポポも外来種です。

外来植物は一時的には爆発的に繁殖して猛威をふるうこともあります。数年経つと在来種におされて衰退していくものもあります。河川敷のように環境がめまぐるしく変わる所では生存競争も激しいでしょう。

(いもり)

今年の3年生の総合的な学習のテーマ、「遠くへ」の内容として、1学期の本郷台駅付近の探検、散策を受けて、2学期の学習を「どう進めるの?」とクラスのみんと相談した結果、いたち川を調べたいという意見がほとんどを占めました。

そこで、第1回目の現地調査。9月20日の「ふれあい運動会」が終わった次の週に、栄区役所裏手の城山橋から天神橋前の大いたち橋、小いたち橋まで出かけてみました。その日は時間が限られていたためあまり遠くへは行けませんでした。いたち川との本格的な初めてのふれあいに、これからの学習の広がりを予感させる活動になりました。

10月9日の第2回目はもっと「遠くへ」、さらに上流に行ってみることにしました。よく晴れた秋の日、小山台のバス停からバスに乗って本郷台駅前へ。そこから城山橋に出て、前回までの天神橋を越えて上流の方へどんどん川沿いを歩いていきました。時々、川辺に下りて流れる水を触ってみたい、足下の黄緑色のやわらかな苔をなでたり、「川辺のウイナー」と呼んでいるというガマを見たりしながら、本郷小学校の裏を通り過ぎると鮮やかな赤い大きなアーチ型の橋が目に入りました。目的地の扇橋です。扇橋の水辺広場で川の流れる2筋に分かれ、上流らしい澄んだ空気の中で流れも清らかになってきたように感じられました。少し大きめの石がごろごろしています。もう一方の流れは水生植物が生い茂る中に姿を隠し始めていましたが、近寄ってみると大きなオタマジャクシやアメンボ、メダカなどたくさんの種類

の水辺の生き物が住んでいるのがわかり、子どもたちも目を輝かせていました。

そして、「(いたち川には)橋がいっぱいあるなあ」ある一人の子の何気ないつぶやきが、これらの活動をまとめて紙芝居する取り組みの一場面の「橋物語」のきっかけになりました。秋に行われる「小山台フェスティバル」での発表を目指して頑張っています。

正直なところ、小山台小学校に通う3年生にとって、いたち川の存在は、すぐに遊べる身近な川というより、少し背伸びをして「遠くへ」行かないとふれ合えない川という印象なのかもしれません。しかし、このような活動からいたち川を通して栄区の豊かさや素晴らしさを感じ、よりいっそうこの地域への愛着が深まっていけばと思います。

#### ☆子どもたちの感想より☆

今回は2回目のたんけんでした。1回目では見られなかった「シラサギ」や「カワセミ」が見られてうれしかったです。シラサギの足の部分を見たらきみどりでした。

きょうはいっぱい生き物を見ました。カメとアヒルとカエルがいて、ぼくは生き物がすみやすい川だとわかりました。

いたち川を利用している人がいっぱいいてびっくりしました。ほいく園の人がおさんぽきていたり、絵をかいている人がいました。

前に行った時はカモとかしか見られなかったけど今回は、カワセミやアヒルなども見られたのでとてもうれしかったです。あとはじめてカメを見ました。いっぺんに2ひきも見られたのでうれしかったです。

### キャリアコミュニケータープログラム2003 開催のお知らせ

社会とふれあい、将来への夢と希望を持つきっかけをつくることを目指し、NPO法人キャリア・ワールド主催、いたち川 OTASUKE 隊後援により、キャリアコミュニケータープログラム2003が開催されます。このプログラムは全国12地区で開催されており、神奈川県では伊勢原市と横浜市栄区にて行われます。「野外へ飛び出そう」をテーマとして自然とのふれあいの大切さを語り合う場を計画しています。皆さま是非ご参加下さい。(参加費無料)

日時 平成16年2月21日(土)午後2時から

場所 神奈川県立地球市民かながわプラザ

発行年月  
2003年11月

発行：独川OTASUKE隊(いたちがわおたすけたい)

OTASUKE隊事務局：栄区役所区政推進課企画調整係 〒247-0005 横浜市栄区桂町303-19  
TEL 045-894-8331 FAX 045-895-2260  
栄土木事務所下水道係 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷1-6-1  
TEL 045-895-1411 FAX 045-895-1421  
(お便り・お問い合わせはこちらまで)

通刊23号



# いたち川の生き物たち -- 魚類 --

[参考・引用文献] 「ちいさな生きものたち」  
横浜市環境保全局発行 「よこはまの川の魚たち」

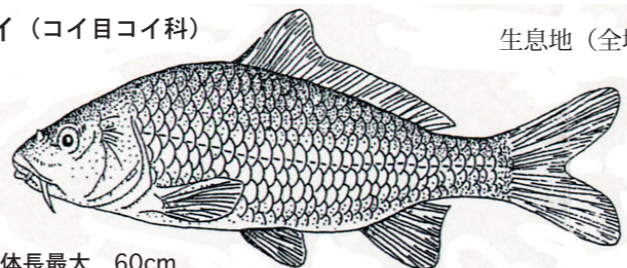
フナ (コイ目コイ科) 生息地 (全域)



体長 25cm位

特徴 河川中流では淵に生息し、下流域では全面に生息していますが、いたち川では人に馴れていることもあり、コイの群の中にもいます。  
体型 コイの形ですが、口にひげがありません。  
フナの種類 ギンプナ、キンブナ、マブナ

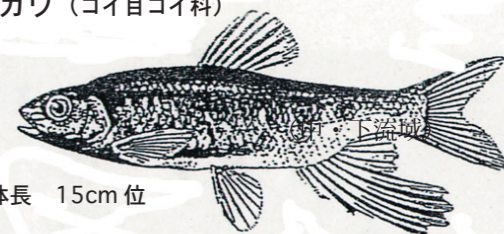
コイ (コイ目コイ科) 生息地 (全域)



体長最大 60cm

特徴 いたち川には上流から下流まで川全面に生息しています。これらのコイは、いたち川がドブ川となっていた約25年位前にボウフラ退治のために放流したものです。  
体長 最大60cmと言われていますが、いたち川のコイの中には1mを超え10kg以上のものもいます。  
コイの種類 マゴイ、三色(サンケ)、紅白、ドイツゴイが有名です。

オイカワ (コイ目コイ科)



体長 15cm位

特徴 中流から下流域までの水の流れるある瀬に多く生息している。いたち川では神戸橋より下流に生息し、上流ではアブラハヤのみを確認しています。5~8月に浅瀬の砂礫床に産卵します。  
体型 細身で尾ビレは雄の方が大きい。  
体色 背は青味を帯びた淡褐色、腹は銀白色で赤味を帯びた小横斑は7~10ある。繁殖期の雄は横斑は赤色、腹部は暗紅色、その他は緑青に変色します。

## その他に見られる魚類

その他にいたち川に生息している魚類としては、メダカ、ウナギ、ナマズ、ヨシノボリ、ボラ、アユなどが確認されています。  
外来種では、ブラックバス、ブルーギル、カダヤシ、テラピア、などが確認されています。

水人子 (ミジンコ)

アブラハヤ (コイ目コイ科) (上流域)



体長 10~15cm

特徴 河川の上流域の清流に生息する魚ですが、いたち川では海里橋より上流に多く、草や石の陰に生息しています。  
体型 細身で細かいウロコがあり側線があります。  
体色 背は黄褐色~緑褐色、腹は黄色味をおびた銀白色

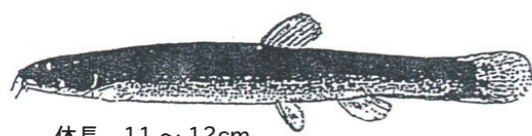
モツゴ (コイ目コイ科)



体長 8cm位

特徴 流れの弱い淵の泥底に生息し、下顎が出ていることから別名「くちぼそ」と言われています。雄が産卵床をつくり孵化するまで卵をまもる。  
体型 細身でアブラハヤよりウロコが大きい。  
体色 暗銀白色で体側に縦条がある。

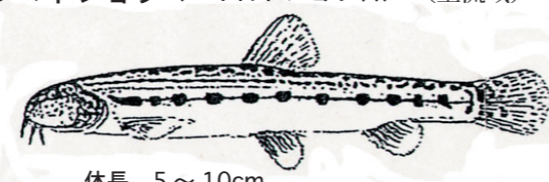
ドジョウ (コイ目ドジョウ科) (全域)



体長 11~12cm

特徴 池沼や止水域の川、水田等の泥底に生息しています。ドジョウはエラ呼吸のほかに腸による空気呼吸が必要で時々水面に顔を出します。  
体型 細長く断面は円形で口の周辺にひげが10本あります。  
体色 背は暗橙緑色、暗色の斑点が多数あり、腹部は黄褐色。

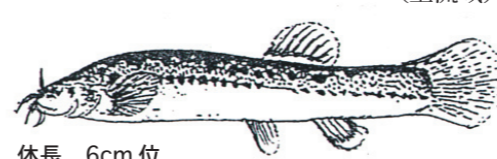
シマドジョウ (コイ目ドジョウ科) (上流域)



体長 5~10cm

特徴 池や小川の流れの弱い砂床に生息しています。上流や源流の「きれいな」水域に出現する指標種です。いたち川源流部にも生息しています。  
体型 細長く断面は楕円形で口の周辺にひげが6本あります。  
体色 淡褐色、体側中央線に8~16の暗褐色の斑紋があります。

ホトケドジョウ (コイ目ドジョウ科) (上流域)



体長 6cm位

特徴 源流部の穏やかな流れの小川で砂礫底、泥床に生息します。シマドジョウ同様「きれいな」水域の指標種で絶滅危惧種に指定されています。いたち川源流部でも確認することは希です。  
体型 ドジョウとしては「ずんぐり」型で口の周辺にひげが8本あります。  
体色 背は黄褐色、腹部は淡い黄褐色、体側に褐色の点が散在する。

## 季節はずれのカルガモ親子

八月のある日、OTASUKE隊員の一人から「最近、本郷中の辺りでカルガモの子どもが産まれたよ。」との話を聞き、川に沿って探し歩いてみました。

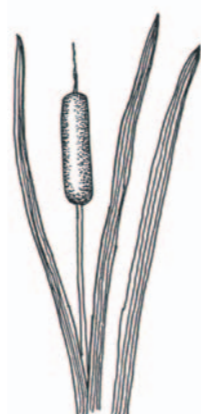
城山橋を過ぎた辺りで一羽の親ガモを見つけ、近づいてみると・・・すぐそばの岸辺の草陰から、握りこぶしほどの大きさの子ガモ二羽が姿を現しました。二羽は草陰に隠れたりしながら、水の上をちようちよのように元気に泳ぎ回っていました。知らないうちにお母さんと少し離れてしまったことに気づき、必死にお母さんを目指して泳いで行ったり、流れの強い所ではころころと流されてしまったりするなど、動きがとても愛らしく、暑さも忘れてしばらく見守っていました。

通常、カルガモの子どもは六月頃に産まれるのですが、卵がへびに襲われてしまった等、何かの理由で卵が孵せなかった場合、再び卵を産むことがあるとか。このお母さんも、悲しい出来事に負けずに再チャレンジしたのかもしれない。

その後、子ども達はすくすくと育ち、九月の中頃にはお母さんとほとんど変わらない立派な姿に成長しました。  
・・・そして季節も変わり、いつの間にか巣立つて行ってしまったようです。(風見鶏)

## いたち川で見られる植物 ②

### ガマ



見たらすぐわかる水辺の代表的な植物にガマがあります。いたち川でも海里橋の下流や瀬上沢の奥などで見られます。いたち川で見られるのはヒメガマという種類です。ガマの穂と呼ばれるウインナーソーセージのような形をした円柱形の花序が特徴です。

茎の先に雄花穂(3~9センチ)がつき、その下に茶褐色の雌花穂(6~10センチ)がつながってつきます。雄花穂と雌花穂の間には花のつかない裸出した軸があります。花は小さく、雄花も雌花も基部に長い毛があります。

夏、六~八月に開花し、秋には穂がはじけて白い綿毛が風に飛ばされいきます。川沿いのお宅では洗濯物に綿毛がついて困るといふ苦情も聞かれます。

茎は直立し、高さ1.5~2メートルになります。葉は幅一センチ以下で細長く、下部は長い鞘となつて茎を包んでいます。多年草で、根茎が地中に横たわり伸びていきます。(いもり)